

「芸術祭」をひも解く：近代化と万博 - オリンピック - 芸術祭

【第3回 ゲスト：アイゼア・バルセニエラ氏（キュレーター・批評家）】 レポート

2022年1月15日（土）18:00～20:00

オンライン実施

最終回となった「芸術祭をひも解く」は、海外からアイゼア・バルセニエラさんを迎え、ヨーロッパを中心に芸術祭がもたらす社会的影響を見つめ直し、芸術祭自体の意義や目的意識についても考えていきました。

「Grand Events and Social Bonds（大規模イベントと社会の関係性）」と題された今回のレクチャーでは、大規模なイベントと社会の関わりということで、オリンピックと芸術祭といった巨大なイベントが、その開催地となる国や都市、地域にどのような経済的、社会的な影響を与えるのかということ、スペインの事例とドイツの2つの国際展からみていきました。

スペインで1992年に開催されたバルセロナオリンピックは、経済的黒字が出た唯一のオリンピックと言われています。開催背景には、1980年代の深刻な経済危機がありました。産業都市だったバルセロナは経済危機により衰退していましたが、オリンピック開催にあたって国から拠出された補助予算を利用し、都市の再開発を行います。オリンピックによってバルセロナの国際的な知名度があがり、観光客が急増したことにより、観光都市として復活していきます。

このように、オリンピック開催による経済効果として衰退していた都市が復活したという成功面がある一方、社会にとって本当に良いことだったのかどうかも考える必要があります。「Tourist: your luxury trip my daily misery（観光客へ：あなたたちの豪華な旅による私の惨めな日常）」（図1）は、ビーチを望む建物の壁面に書かれた落書きですが、観光客が増加したことによる社会への影響を垣間見ることができます。1992年にオリンピックが開催された後、2000年代にかけて観光客が増加したことによって、宿泊施設なども増加していきました。それに伴い、都市中心部の地価や家賃が高騰し、地元住民が家賃を支払えずに退去せざるを得ない状態が生じ、空き家は民泊として観光客が利用する、といった構図ができあがってしまっています。

オリンピックは経済的な利益だけではなく、スポーツの意義や価値、親しみといったことを産み出しているという見方もできます。しかしながら、本当にそう言えるのでしょうか。国の威信をかけ、メダルを奪取するために選手育成に力が入られる結果、プロスポーツに関しては活性化すると言えますが、スポーツ愛好家を増やしたり、健康を増進したり、あるいはスポーツに関わる仕事を増やしたりといった一般大衆への効果はほぼゼロに近いという研究結果もあります。オリンピックはいわばスポーツのスペクタクルなイベントとして存在しているのであって、人々がスポーツに向き合ったり親しんだりすることが目的ではない、ということを実感することも必要でしょう。

フィンランドでは、オリンピックにかかる予算をメダルを取るために使うのではなく、国民の健康促進や福祉の充実に使う政策をとっています。それに対して、2012年にオリンピック開催国となったイギリスでは、オリンピックの赤字による経済へのダメージが原因で、スポーツ施設が閉鎖されるといった現象も起こっています。



図1（動画よりキャプチャ）

バルセロナと同じような背景を持ちながら、文化施設を常設することによって経済的に復活した都市もあります。スペイン北部にあるビルバオでは、1997年にビルバオ・グッゲンハイム美術館が設立されたことによって、年間100万人に及ぶ観光客が集まる都市になりました。近現代アートによるこうした都市の再生例を受けて、スペインの各地で現代アートを取り扱う美術館やアートセンターなどが設立されましたが、成功に至ったところはなく、赤字を抱え、コロナ禍によって閉鎖してしまっところも少なくありません。ビルバオに程近い都市レオンには2005年に設立されたカスティージャ・イ・レオン現代美術館がありますが、莫大な建築費と維持費がかかっている反面、期待していたほど観光客を呼び込むことができず、リーマン・ショックを契機とした世界的な経済危機の余波を受け、2010年以降新たなコレクションを購入することができていないそうです。

世界的な芸術祭の開催状況をみると(図2)、ヨーロッパでは136件、アジアでも47件と世界中で多くの芸術祭が開催されていることがわかります。また、芸術祭の増加傾向(累積数)をグラフ(図3)でみると1990年~2000年代にかけて急増し、新しく始まった芸術祭の数を10年ごとにグラフ化したもの(図4)からも、2000年以降にはじまった芸術祭が多いことがわかります。ここでバルセニーラさんが「当たり前すぎて見逃しがち」だと注意を促すのが、「誰のため、なんのための芸術祭か」という視点です。誰を対象にしている、どのような観客をつくりたいのか、開催地になる都市や地域に何をもちたしたいのか、といった目的意識はついつい見逃されてしまうと言います。

ドイツのカッセルでは、1955年から5年に一度の頻度で「ドクメンタ」が開催されています。当初は、第二次世界大戦のトラウマを癒す目的で、地域住民、ドイツ国民を対象に設定されましたが、1972年にその方向性が大きく変わります。ディレクターを務めたハロルド・ゼーマンによって、アートの専門家のための最先端のアートを紹介し、アートに関わる人々のネットワークを創出する場として設定し直されました。この段階で、対象から地域住民は外れることとなりますが、途中で目的などを変更することもできるという事例でもあります。

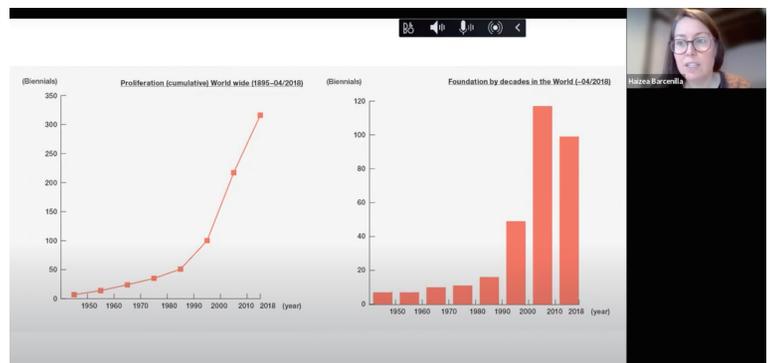
芸術祭の対象と目的は、どのように設定できるのでしょうか。バルセニーラさんは以下の4つのパターンを提示しました。

1. 観光客を呼び込むために都市の国際的な知名度をあげる。
2. アートのプロが出会い国際的なネットワークをつくる機会を創出する。
3. 新しい観客層や地域にアートを紹介し、アートに関わる仕事を生み出す。
4. アートや文化を通して、政治や社会的課題を取り上げる。

1の場合、開催期間に多くの観客を見込むことができ、恩恵を受けるのは宿泊施設や外食産業、また建築関係や土地を保有する資産家なども経済的利益を期待できます。アート愛好者も恩恵を受けますが、規模としては小さくなり、挑戦的な作品よりも大衆に受け入れられやすい作品が好まれます。



図2 (動画よりキャプチャ)



左図3、右図4 (動画よりキャプチャ)

2の場合では、アートのプロフェッショナルを対象にしていることから、宿泊施設などの観光業よりもアート愛好者が得る恩恵が大きくなり、より先端的で挑戦的な作品に出会うことができます。

3と4は関係し合っていると言えます。対象となるのは地域住民や地域のコミュニティで、自分達が深く関係する事柄と作品が密接につながることで、自分ごととして参加することができ、大きな恩恵を受けることとなります。また、アート愛好家にとっても、その地域だからこそ生まれるアートに出会う機会となり、新しい可能性や広がりを経験することができる場として、受ける恩恵は決して小さくありません。

地域住民を対象とした例として、「ミュンスター彫刻プロジェクト」があります。ドイツのミュンスターで10年に一度開かれているこの国際展は、都市のために開催される公共性の高いもので、作品は都市の歴史を扱っているものがほとんどです。準備期間が十分にあることで、アーティストは長期間滞在制作を行い、長期的な関係性を地域と築くことができ、ナチス政権下のトラウマに向き合うような作品が多く発表されています。

最後に、これまでの芸術祭、そしてこれからの芸術祭を考える上で自覚しておきたい「問いかけ」が5つ紹介されました。

1. 芸術祭の目的と観客をどのように想定しているのか？
2. 芸術祭で実施するプロジェクトと開催都市の持つ歴史や文化的な文脈とはどのような関係があるのか？
3. 芸術祭の事前・事後において、観客とどのような活動を実施するのか？
4. どのような新しい地域のネットワークや観客、公衆をつくらうとしているのか？
5. もし、開催都市（の人々）のアートに対する熱量を増やしたいのであれば、開催期間以外でどのようにアプローチできるのか？

1は前述されてもいるように、見逃されがちな点です。2については、地域住民がどれくらい自分ごととして捉え、関わるることができるのかにつながっています。地域住民がどのように芸術祭と関わっていける

か、3、4、5も同様の視点からの問いかけです。地域を第一の意義に掲げた場合、地域のネットワークやコミュニティをつくらうとする目的や意味を考えると同時に、どのようにしたら開催期間以外も継続できるのかに腐心すべきです。芸術祭は往々にして数年に一度の頻度で開催されますが、開催期間以外の活動はほとんどみられません。このように分断した活動では、都市でアートが浸透することもうまくいかず、せっかく作り出したネットワークやコミュニティ、新しい観客層も活かすことができません。また、例えば、「あいちトリエンナーレ 2019」では従軍慰安婦をテーマにした《平和の少女像》が大きな論争を巻き起こしましたが、開催国や都市が抱えるトラウマ的な課題をとりあげるならば、継続した議論を実施していく覚悟を持つことも必要です。

ヨーロッパでの事例をもとに芸術祭の現状や背景を見てきましたが、日本における芸術祭にも共通している部分が多く、バルセニーラさんが紹介した4つの目的設定と、5つの問いかけは、「あいち 2022」開催に向けて我々一人一人が念頭に置いておくべき重要な視点を得ることができました。

(レポート松村淳子)